

令和5年度

研修集録



秋田県立湯沢翔北高等学校雄勝校

目 次

(1) 令和5年度校内職員研修計画について	2
(2) 令和5年度校内相互授業参観研修の記録	3
(3) 学習指導案		
授業者 国語科 臨時講師 斎藤 卓哉	5
(4) 特別支援教育に関する職員研修について	8
(5) 校外研修報告	10

(1) 令和5年度校内職員研修計画について

令和5年度校内研修 年間計画 ～授業改善への取組～

教務(研修)部

【授業改善への取組について】

< 授業改善のテーマ > ICTを活用した『主体的・対話的で深い学び』の授業改善

令和4年度指導主事訪問の研究授業のフィードバックおよび指導助言を受けて、今年度も継続して組織的な授業改善に取り組む。

< 共通実践事項 >

1. 本時で何を身に付け、何ができるようにするのか、明確な目標の明示

- ・ 生徒の興味・関心や疑問を引き出して、学習課題を設定する。
- ・ 具体的にゴールの姿を示す。また、生徒に課題解決の方法や結果の見通しをもたせる。
- ・ 生徒が自ら学習の振り返りができるような発問をする。
- ・ 明瞭・明快な発問、興味や意欲を呼び起こす発問、生徒の実態に合っている発問、タイムリーな発問など、生徒の学習状況を判断しながら、わかりやすく意図的な発問をする。

2. ICTを活用した「思考を交流させる場面」「交流を通じて思考を広げる場面」「協働して問題を解決する場面」等の設定

- ・ ICTの活用を通して学習意欲を喚起し、主体的な課題解決の力や、思考力・判断力の育成につなげる。
- ・ 対話を通して課題が解決できるよう、相手の話をじっくり聞く「共感」「傾聴」する姿勢や、疑問点を質問する姿勢を奨励し、聞き手としての能力を育てる。
- ・ ICTの活用が、目的や内容そのものにならないようにする。

【校内研修年間計画】

1. 相互授業参観研修

1期：令和5年 6月12日(月)～ 6月23日(金)2週間

2期：令和5年10月23日(月)～ 11月 2日(木)2週間

授業参観後に、授業参観シートにコメントを記入する。

シートの授業担当者の枠に、【参観した科目名とコメント】を入力する。

入力後は研修部で集約してフィードバックする。

1期後に職員アンケートを実施して、ICTの活用状況と、その課題について確認する。

2. 職員研修

研修テーマ：主体的・対話的で深い学びの中でのICT実践

期日：令和5年12月12日(火)

講師：高等学校で勤務経験のある先生に依頼する。

相互参観研修のフィードバックや、各教科の「主体的・対話的で深い学びの中を意識したICT実践」および授業内での課題などを集約して、それらの改善につながる指導助言を講義・演習等していただく。

3. 校内研究授業

実施時期：令和5年10月頃

担当教科：持ち回り制として、1～2教科で実施する。

(2) 令和5年度校内相互授業参観研修の記録

授業者	良かった点	工夫・改善した方が良い点	その他
大友 佐和子	<p>【1G現代の国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒にフォームで解答を入力させ、それをスプレッドシートに一覧で出力することで、全員で解答の比較・検討ができていた。自分の解答が授業で使用されているので、生徒も集中して説明を聞くことができていた。 		<p>【1G現代の国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒が普段使用している言葉遣いや文章表現をより適切な表現ができるように改善するような授業内容であり、就職や進学試験の時に必要になるであろう能力が育成される取組であると感じた。
藤谷 聡	<p>【3G政治経済】</p> <ul style="list-style-type: none"> 黒板・電子黒板・プリント・ノートの使用目的が明確であった 板書がわかりやすい 生徒から考えや意見を引き出していた 「GOAL」から到達点が導きやすい仕組みであった <p>【2G地理総合】</p> <ul style="list-style-type: none"> 電子黒板、黒板、ノートの活用が効果的だった 大量な視覚教材は、生徒をひきつける 単元のなかで流れがしっかりとできており、生徒自身が目的を明確に理解して学習を進めることができるようになっていた 褒めるところは褒める、評価している様子だった 見せていただいた単元は湯沢や雄勝につながる内容構成になっている上、「地域実践」との科目横断的な学習になっている上、身近な地理について生徒がより興味をもち学ぶことができると感じた 生徒のリアクションを見ていれば、この科目を愛していることがよくわかる。 <p>【3G政治経済】</p> <ul style="list-style-type: none"> 黒板・電子黒板・プリント・ノートの使用目的が明確だった。 「GOAL」が明確かつ、学習内容を自分の言葉でまとめる力が求められるものだった。 「最近気になったニュース」についてのスピーチは、すばらしい試みだと感じた。生徒のスピーチのよい点や改善点に対する指導・助言が的確であった。生徒同士がスピーチを相互評価できるしくみも、見習いたいと感じた。 		<p>【3G政治経済】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業計画がしっかりとされており、見習うべきことばかりでした。生徒に話をさせて導いており、教えすぎておらず理想的な授業でした。「GOAL」を最初に見せておりましたが、本校の生徒でも考えやすいようにフォーマットを与えており、生徒がそこに向かいやすい展開でした。集中力のない生徒ばかりですが、全員が授業に向かっていました。 <p>【2G地理総合】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業に終始集中している様子でした。興味関心を持たせ学習意欲を持続させる先生の技がたくさんつまっていると感じました。 先生の声量や声質はとて聞き取りやすく穏やかで、生徒は落ち着いて授業に臨むことができると感じました。これも教員に求められるスキルだなと改めて感じました。 文字や絵を書き写す際に時間のかかる生徒が数名いるかと思います。ところどころで先生の説明を聞かずに少し前の部分の書き写しをしている生徒がいました。それでも飛ばさずにきちんと書き写して、終盤には挽回していました。 <p>【3G政治経済】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒が自分の言葉でスピーチやGOALの説明をしようと懸命になっている姿が印象的でした。先生が生徒をあたたく見守る姿勢が根底にあるからこそ、安心して発言できるのではないかと感じました。
小泉 由起子	<p>【2Gフードデザイン】</p> <ul style="list-style-type: none"> 調理実習の授業での生徒の活動の流れがきちんと完成されており、生徒もそれを理解できていた。普段からの積み重ねだと感じた。 作り方は文章と実際に作って見せる二本立てで教授していた。 生徒を褒めるところは褒める一言「いい質問でした」 検定対策の実習で、検定本番は制限時間との勝負であるため、普段の授業から時間の管理をさせて感覚を意識させていた。 「自信がない人は、こんなふうにしてみよう」など、失敗しないように対処法をさりげなく伝えていた 調理実習は手際、見通しを持った活動が重要であるため、「どんな手順で作れば、40分間で、片付けも修了して、2品作り上げることができる？考えよう。そしてそのプランをまとめてみよう」などと思わせる場面があった。 調理中は皆が同時進行できるように、ひとつひとつ声かけていた。全員の間を見て回り、細やかに助言されていた 一度教えたり経験させたこと、既習事項についても繰り返し思い出させて知識の定着を図っていた <p>【1G家庭総合】</p> <p>調理実習において、全体に指示する場面だけではなく、作業の詳細を見せながら指示する場面では男女別に集めてそれぞれ説明するなど、指示が確実に伝わるように臨機応変な対応が見られた。</p>	<p>【1G家庭総合】</p> <p>大まかな作業手順を板書するなど、授業の流れをいつでも見られるように示しておくのと良いかもしれません。</p>	<p>【1G家庭総合】</p> <p>調理実習の献立が味噌汁とおにぎりだったが、下準備から片付けに至るまで、生徒がすぐにも生活の中で使うことができるような学習内容だった。みんな意欲的に活動している姿も印象的だった。</p>

佐藤 亜樹子	<p>【1G情報処理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体例を取り入れながらわかりやすい説明がされていました。 ・集中力が切れかかってしまう生徒への声かけが適切でした。 	<p>【1G情報処理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の座る場所によっては、ホワイトボードが反射して見えづらいところもありましたので、全体への確認がPCを活用するのでもいいかと思いました。 	<p>【1G情報処理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどの生徒にとって「はじめまして」の授業内容であるため、それを知識や技術として習得させるのは大変だろうと思いました。同じ実技教科ではありませんが、調理実習とは違い、生徒の動きや理解度がわかりづらいため指導する側の苦勞を感じました。ありがとうございました
高橋 直子	<p>【3G社基】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の理解度を確認しながら進めており、全員が授業についていけるスタイルが出来ていました。生徒との対話が多く、生徒との信頼関係ができていくことがよく分かる授業でした。 ・他教科（公民）との関連も話していて、学習している内容が教科を横断して理解できる点良かったです。 ・プリントが、生徒にとって簡単すぎず難しすぎず、丁度良い記述量だと思いました。 		
寺田 尚志	<p>【2G数学A】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業のねらいを明確にしており、丁寧に授業を進めていました。 ・電子黒板と備え付けの黒板を併用し、その活用が効果的でした。 ・「地球人」と「日本人」など具体的に解りやすい事例を取り上げていました。 <p>【1G数学I】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板を駆使し、わかりやすい授業が展開されていた。生徒の反応から先生の日頃の授業の丁寧な取り組みが想像できた。 <p>【3G数学演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板に書いた授業の目標や、公式は最後まで消さずに、最後まで見ることができていました。 ・生徒が考えて発言する場面が多かったです。 <p>【1G数学I】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板にワークシートを投影し、色分けしながら説明する場面は、プロセスが分かりやすいと感じた。 ・普通に計算すると手間がかかるが、乗法公式を使うと楽に解ける例を示していた。 ・生徒のできている部分は褒め、ミスの原因となった部分は的確に助言していた。 ・類似問題を電子黒板で流し、早くできた生徒に挑戦させる等、生徒を飽きさせない工夫が見られる。 	<p>【2G数学A】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特記事項なし <p>【1G数学I】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標の表現が、やや曖昧な部分があると感じた。（「しっかりと暗記」「パッと展開できる」）細かい部分です。 	<p>【2G数学A】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一方的な授業展開ではなく、生徒の様子をよく観察し対話を進めながら実践しており、大変参考になりました。 ・補習に参加している生徒を中心に観察しましたが、難儀している様子がよく分かりました。どのような指導をすれば少しでも改善できるのか、教科の枠を越えて検討する必要性を感じました。 <p>【3G数学演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由に発言する生徒が数名いるので、どこまで制して、どこまで自由にさせるかが難しいと思いますが、生徒の声を受けながら上手に展開していたと思いました。 ・公式へのあてはめ方の板書の仕方がわかりやすかったです。代入がわからない生徒が数名いるのでわかりやすいと思いました。 <p>【1G数学I】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が積極的に活動に取り組んでいる様子が見られました。制限時間内に問題に正解したら座れるという形式での問題演習など、生徒を飽きさせないための工夫がなされていると感じました。
加納 綾子	<p>【2G生物基礎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習が丁寧に、自然と本時の授業に入る流れが良かったです。 ・ワークシートが生徒が取り組みやすいように記入欄など工夫されていて、見習いたいと思いました。 <p>【1G科学と人間生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・用語整理の時、生徒の手元のプリントと同じ画面を電子黒板で提示して書き込むことで、効率よく進行できていた。 ・プリントの構成と授業展開において、用語等を分掌と関係図で2回確認することにより、生徒の知識の定着に繋がる良い取組だと感じた。 <p>【2G生物基礎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板をつかって基本事項を丁寧に効率よく確認していました。 ・授業の最後にグループで討議させることで、学習内容をより深く考えさせていました。 <p>【1G科学と人間生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTを用いて用語整理などの知識注入はスピーディーに行い、各班での話し合い活動に時間を多く割くことが出来ていた。 ・授業の前半で得た知識・用語を使って問題の説明を考えさせるという課題設定をしており、知識の定着に大変有効的だと感じた。 ・班ごとの話し合いの場面で、どの班にも丁寧にアドバイスをして回っていた。 	<p>【2G生物基礎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人で考え取り組む時間も確保されていたが、グラフの説明を聞く、記入する時間（記入されているかの確認）があっても良かったかと思いました。 <p>【1G科学と人間生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素循環や炭素循環について、関係図で整理する時、イラストや写真等もあるとより生徒の記憶に残りやすいかと思いました。 ・最初に、生徒自身が調べて空欄を埋めてみるなど、自力解決に挑戦する時間を設けてみるのもアリかもしれません。 <p>【2G生物基礎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例として取り上げた樹木や水中生物の中には身近なものも含まれています。「地域」を意識して説明されたかと思いました。ちなみに私の家の周りには沢ガニが出没しますし、近くの川ではプラナリアを採取できます。 <p>【1G科学と人間生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・覚えた用語を的確に使わせることと、調べることを焦点化させるために、説明に必ず使用しなければならない語句リストのようなものを提示すると良かったかもしれません。 	<p>【2G生物基礎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指名して答えるスタイルではなく、全体に質問すると自由に答えが返ってくる雰囲気が良かったです。生徒一人ひとりの発言にも丁寧に耳を傾け、きちんと意見を拾い先生が言葉を返すといった生徒と先生の関係性がよく成り立っている授業でした。ありがとうございました <p>【1G科学と人間生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意識が跳んでいる生徒が一人もいませんでした。説明が分かりやすく、聞き取りやすいのだと思います。私もそのような説明ができるように心がけたいと思います。 <p>【2G生物基礎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一つの答えに向かうのではなく、多面的に物事を捉えさせ、多様な答えを導き出す手法に興味を惹かれました。 <p>【1G科学と人間生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各班を回っているときに、「何でそう考えたの?」「今言ったことを授業でやった言葉を使って言うとどうなる?」などの問いかけを丁寧にしており、それによって全員がしっかりと頭を使って考えている授業であったと感じました。

(3) 学習指導案

言語文化 学習指導案

指導者 斎藤 卓哉
対象クラス 普通科 1年G組
使用教科書 新編 言語文化(大修館書店)

1 単元名 現代文編2 表現を味わう
扱う教材 「とんかつ」(三浦哲郎)

2 単元の目標

- (1) 文章の意味が文脈の中で形成されることを理解できる。(知識及び技能) [(1)エ]
- (2) 場面ごとの言動に込められた登場人物の心情を読み取れる。
(思考力、判断力、表現力等) [B読むこと(1)ウ]
- (3) 登場人物の人物像や心情を読み取ることに興味を抱き、言動と心情のつながりを理解しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3 単元と生徒

- (1) 生徒観 話し合い活動や発表活動に対して意欲的で、自分の考えを他者に伝えようと努力する姿勢がみられる一方、語彙の不足や言葉に込められた意味を文脈をふまえて捉えることについて課題がある。一つ一つの言葉の意味を的確に捉え、語彙を豊かにすることを通じて、言葉が文脈の中で持つ意味について考える力を高めたい。
- (2) 教材観 本単元で扱う教材は、生徒に近い年齢の人物が登場するうえ、多くの生徒が中学校時代に作者三浦哲郎の小説「盆土産」を学習していることもあり、生徒にとって親しみやすい小説である。登場人物の言動に着目し、そこに込められた心情を考察する力を高めさせたい。
- (3) 指導観 話の流れに伴う登場人物の心情・行動の変化を的確に理解し、表現する活動や、「とんかつ」に込められた登場人物の心情について、言動を手がかりとして読解する活動を通じて、相手の言動の真意を理解するとともに、自分の思いや考えを適切な言葉で伝えようとする技能の育成につなげたい。

4 指導計画(全6時間)

- 第1時 本文全体を音読し、話の流れを捉える。
- 第2時 須貝親子が泊まりに来た日から翌朝外出するまでの、奥さんの心情の変化をまとめる。
- 第3時 須貝親子の旅の目的や、抱えた事情を読み取る。
- 第4時 息子の入門前夜の夕食の「とんかつ」に込められた奥さんや母親の心情を理解する。(本時)
- 第5時 1年後、息子が心身共にどう成長したかを読み取る。
- 第6時 作品の主題について話し合い、発表する。

5 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文章の意味が文脈の中で形成されることを理解している。	本文の描写をもとにして、言動に込められた登場人物の心情を読み取っている。	登場人物の人物像や心情を読み取ることに興味を抱き、言動と心情のつながりを理解しようとしている。
	本時	

6 本時の計画（4 / 6）

(1) 本時のねらい

「とんかつ」に込められた、奥さんや母親の心情を理解できるようにする。

(2) 学習の展開

過程	生徒の学習活動	教師の支援・指導上の留意点	評価
導入 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習内容を振り返る。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板による動画視聴により、永平寺の修行の厳しさについて補足する。 	
<p>本時の目標 「とんかつ」に込められた、奥さんや母親の心情を理解できるようになる。</p>			
展開 (40)	<p>主発問 直太郎の入門前夜の夕食に出された「とんかつ」には、奥さんや母親のどのような心情が込められているのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夕食にとんかつを要望した時の母親の心情について、ワークシートにまとめ、ペアワークの後、クラス全体に発表する。 (個人での思考→ペアワーク→発表によるクラス全体での共有) ・夕食の準備をする時の奥さんの心情について、ワークシートにまとめ、ペアワークの後、クラス全体に発表する。 (個人での思考→ペアワーク→発表によるクラス全体での共有) ・夕食時の母親の心情について、ワークシートにまとめ、ペアワークの後、クラス全体に発表する。 (個人での思考→ペアワーク→発表によるクラス全体での共有) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「面会などせずに、郷里で寺を守りながら、息がおよそ五年間の修行を終えて帰ってくるのを待つつもりでいる」という間わず語りの場面での発言内容や、とんかつを要望した際の「即座に」という表現に生徒が着目して母親の心情を考えられるよう、電子黒板で提示して助言する。 ・ペアワークで共有した「心情につながる言動や様子」、「心情」を付せんに入力し、Jamboardに貼りつけるよう 促す。 ・「これまででいちばん厚い」、「じっくりと揚げて」、「出した」という奥さんの行動を、心情を推測する手がかりにできるよう配慮する。 ・ペアワークで共有した「心情につながる言動や様子」、「心情」を付せんに入力し、Jamboardに貼りつけるよう 促す。 ・「しみり」、「お母さんの皿はもう空っぽ」、「お子さんがせっせと食べるのをだまってる」という、夕食時の親子の様子や行動に関する描写に着目させる。 ・ペアワークで共有した「心情につながる言動や様子」、「心情」を付せんに入力し、Jamboardに貼りつけるよう 促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入門前夜の夕食に直太郎の好物を要望した母親の心情を理解することができている。 B（観察、発表、ワークシート） ・行動と心情の関連性を意識して奥さんの心情を理解することができている。 B（観察、発表、ワークシート） ・様子や行動の描写をふまえて、夕食時の母親の心情を理解することができている。 B（観察、発表、ワークシート）
まとめ (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の振り返りをワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの振り返りで自己評価をするよう促す。 	

評価の観点 A(知識・技能) B(思考・判断・表現) C(主体的に学習に取り組む態度)

【授業者感想】

個人での思考、ペアワーク共に、生徒は登場人物の様子や行動に関する本文の描写に注目し、そこから読み取れる登場人物の心情について自分の言葉でまとめようと、懸命に活動に取り組んでいた。また、Jamboardではクラス全員で個人の考えを共有できるという点をモチベーションとしている生徒もみられた。参観者の大友教頭からは、「Jamboardの利点である付せん移動を利用し、注目すべき描写を取り上げている付せんと深い読解ができています付せんをひとまとまりにすることで、生徒の思考を深めるのに役立つ。」という助言をいただいた。今後も生徒が主体的、協働的に取り組める言語活動の実践やICTの適切な活用等に努め、生徒の国語力向上に尽力したい。

(5) 特別支援教育に関する職員研修について

実施日：令和5年12月12日（火）

記録：研修部 加納 綾子

研修テーマ：生徒理解を深めるために ～小坂高等学校の実践例から～

講師：小坂高等学校 特別支援コーディネーター 富樫 さつき 先生

内容

1. 小坂高校について

小坂高校では、もともとは地元の小坂の生徒が大半を占めていた。統合が迫って、花輪からの入学者が増えた。雄勝校と同様に、学習面、生活面、社会性において特別な配慮や支援を必要とする生徒が多い。一方で、障がいを受けたくない、普通の子と一緒に学校生活を送りたい、WISC等の検査に否定的な家庭も多い。

取組①「できる・わかる授業のために」

- ・ほぼすべての教科で TT 授業を実施
- ・授業の UD 化（アカシアデザインとして本時の目標、流れ、提示の徹底）
- ・視覚教材の工夫（ICT 活用、実物教材、手順明示等）によって視覚的に理解しやすい授業
- ・作業活動の工夫を行い、飽きやすい生徒が授業に参加できるようにしている
- ・学習環境の構造化（机の上に出すべきもの、出すべきでないものなど）

取組②「生徒理解のために」

- ・SEN チェックリストの活用
1年生（一部）が対象。1学期に実施して分析し、全職員で共有して2学期から活用。
- ・ASSESS（生活満足度調査）の活用
1・2年全員が対象。8月と2月に実施して分析し、実施翌月から活用。保健室を頻繁に利用する生徒等は低い結果が出てくる。本（CD 付）が販売されているため、実施しやすい。

取組③

- ・個別指導計画の作成
中学校からの申し送り、SEN の結果を参考にして対象者を選抜。
- ・個別の対応マニュアルの作成
個別指導計画を作成している者のうち、特に教職員の共通理解、共通対応を必要とする者が対象。
- ・進路先への引継シートの作成
上記対象者のうち、本人・保護者から申請がある者が対象。

2. 演習「雄勝校の生徒を分析してみよう」

事前に実施した2名の生徒の SEN チェック結果について、まず個人で分析を行い、その後グループで分析を行って対応策を検討した。最後に富樫先生から分析をしていただいた。領域ⅠではLD傾向、領域ⅡではADHD傾向、領域ⅢではASD傾向を分析することができる。

①生徒Aの対応策

- ・領域Ⅰでほぼすべてにチェックが入っていることから、知的障害が疑われる。一方で領域Ⅲにはあまりチェックが入らなかったためASDの傾向はあまり見られない。
- ・聞く力が低いため指示を聞く準備を徹底させる。
- ・できないことを自覚させて自分の課題に向き合うために、生徒同士で作文を添削し合うなど他者の目線を意識させる。
- ・「好ましい行動」「好ましくない行動」「許しがたい行動」を明示して指導する。
- ・指導するうえで、「普通」を目指す必要はない。将来、生活に困らないようにするために、どの力をどの程度付ける必要があるか、本人の望みを聞いてゴールを設定する。

②生徒Bの対応策

- ・領域Ⅰでほぼすべてにチェックが入っていることから、知的障害が疑われる。さらに領域Ⅲにも多くのチェックが入っているため、ASDの傾向も見られ、困り感が強いと思われる。そのため、本人の困り感を保護者にも伝えたほうがよいのではないか。そのうえで、周囲の生徒へ本人の特性について理解を促し、支援体制を整えた方がよい。
- ・実技等での不器用さが目立つことについて、力加減を数値で教え込み、繰り返し練習させる必要がある。適切な声の大きさを判断できない生徒に対しても、数値で教えるとよい。
(例：1はひそひそ話をするとき、2はグループで話し合うとき、3は職員室に入室する挨拶をするとき、4は外で人を呼ぶとき、5は緊急時に助けを呼ぶとき)

3.まとめ

- ・注意をするときは「～してください」ではなく「～します」のように指導した方が伝わりやすい。
- ・発達障害等の生徒は、社会的ルールを知らない生徒が多い、もしくはどのような場面で使うべきルールかを理解していない。常識が無いで終わらせず、どのような場面で使うルールであるか、一つ一つ教える必要がある。
- ・いじめ被害を訴えたときや嫌なことをされたと訴えてきたときには、必ず謝罪の場を設けるのではなく、事実を確認したうえで気持ちを落ち着かせる訓練も必要。嫌なことをされたときに謝罪を受けなければいけないというルーティーンができてしまうと、社会に出た際に困る。
- ・教育センターで開催される特別支援に関するC研修等で、専門知識を身につけたほうがよい。
- ・知的障害の場合は、授業のUD化では限界があるため、個別対応したほうがよい。
- ・生徒の特性がわかることで、より適した指導・支援につながる。
- ・生徒一人ひとりが安心できる学校生活環境を提供し、社会で自立できる可能性を広げられるようにしたい。

Q 就職の応募先企業へ、事前に生徒の特性を伝えるべきか。

A 企業に特性を理解してもらえずに就職しても、離職につながる可能性が高い。あらかじめ伝えて、理解してもらえる企業に就職したほうがよい。

Q 支援が必要な生徒を、他の生徒と同じ基準で評価をしてもよいか。

A 基本的には同じ基準で評価する。本人および保護者から合理的配慮の申請がある場合には配慮する。

(6) 校外研修報告

秋田県総合教育センターC研修

アセスメントの方法と指導の実際

特別支援 高橋 直子

1 はじめに

WISC-IVとは、David Wechslerが開発した知能検査シリーズの一つで、世界的に使用されている、子ども用の代表的な知能検査である。雄勝校の生徒には、WISC-IVを受検した経験のある生徒が複数名いる。センター研修講座として毎年開講されているこの講座でWISCについてしっかりと学び、現場で生かしたいと考え受講を申し込んだ。

2 研修の実施日と目標および内容について

実施日 令和5年6月29日(木) 午前10時から 午後4時まで

研修の目標 児童生徒の特性に応じた指導・支援に生かすことができるように、普段の授業や日常の観察から、より専門的なWISC-IV知能検査の結果を分析するまでのアセスメントの方法や解釈の理解を深める。

研修の内容

< 講義・演習 > WISC-IV知能検査結果の分析と活用(センター集合型 オンライン講話)
日本臨床発達心理士会茨城支部 支部長 ^{だいろく} 大六 一志先生

3 感想

WISC検査日本版の作成の中心人物のひとりである大六先生による講義を受講した。講師の資料は「UDフォント」で作成されていた。また昨年(2022年)に「WISC-V(第5版)」が刊行されており、県内の医療機関でも購入され始めているとのこと。今後はこの新版の検査が増えていくと伺ったが、今回は現行で主要になっているバージョンIVについて講義いただいた。

講師より「WISC知能検査を実施する真の目的は、検査を実施することではなく、受検者のつまづき(問題、主訴)の能力的な原因と対策(指導、支援)を知ることである。」というお話があった。雄勝校では、この数年内で数名の生徒が受検して、その結果を受けて対応している。大六先生がお話されるほぼ全てが、校内での日常でよく見られる場面に酷似するものばかりで、これまでのできごとや生徒の顔を思い浮かべながら話を聞いた。それ以外に新たに知ったことも多く、大変有意義な研修だった。

大六先生は「準備した資料の最後まで到達できないかもしれない」と予告していたが、正にその通りになった。1日間の研修では足りないほど、この内容は知るべき事項がとても多いと感じた。先生が用意してくださった168枚のスライドと、おすすめの本や文献の紹介レジュメ、講義参加者の演習用資料等をよく読み返し、校内の先生方で共有して、技術的コンセンサスを図りながら生徒対応をしたいと思う。そして学んだことを確実に今後の教員生活に生かしていきたい。

令和5年度 ケアラー支援・普及啓発セミナーを受講して

福祉科 高橋直子

1 はじめに

秋田県が令和3年度に実施した実態調査によると、県内には少なくともケアラーが610人余りおり、うち54人がヤングケアラーということが判明した。これを受けて県の健康福祉部 地域・家庭福祉課では、県民へ理解を広げるための事業や、様々な支援策を講じている。今回のセミナーについては、高校教育課からの通知で知ることができた。秋田県では、NPO法人 秋田県介護支援専門員協会へ委託してこのような活動を実施しているとのことで、福祉を教えている立場として非常に興味深いと感じた。

ヤングケアラーの課題については、学校現場も大いに関係することと捉え、今回の参加を決めた。

※ケアラーとは 介護や看病、療育が必要な家族等を無償でサポートする人のこと。

2 研修について

日 時 令和5年12月23日(土) 午後1時30分 から午後4時 まで

Zoom ミーティングによるオンライン配信 定員 500名

対 象 相談援助従事者・行政職員・学校・教育関係者・関係団体等

テ ー マ 「こどもたちの抱える課題、ヤングケアラーの現状と課題」

主 催 者 秋田県

実施機関 特定非営利活動法人 秋田県介護支援専門員協会(秋田県より委託を受け実施)

内 容

第1部 ケアラーに関する秋田県の支援と取り組み

①秋田県の現状と取り組み

②秋田県介護支援専門員協会の取り組み

第2部 子どもたちの抱える課題、ヤングケアラーの現状と課題

講師 NPO法人あなたのいばしょ 理事長 大空幸星氏

第3部 振り返りセッション(グループに分かれて気づきと学びを共有する)

3 感想

これまで、ヤングケアラーと呼称される子どもたちについて、「かわいそう」というイメージを抱いていた。このことについて、受講後のいまは不適切なものだったと感じている。ヤングケアラー本人にとっては、ケアラーと認知されることの負担がある、ということへの理解が欠けていた。まずは子どもの置かれている現状をきちんと知ることが大事であり、その子の役割 = 存在意義になっていて、自分がケアしているという事実こそが、その子の当たり前の役割、と認識しているのに、それを第三者がかわいそう、といっているはいけないということが分かった。家族以外の支援の手が介入すべきケースもあるが、支援を受けるために、その場合かわいそうな自分を認めなければならない。子どもたちの家族観を尊重する視点を持っていなければならないと感じた。

また、ヤングケアラーとは介護だけではない。外国の親御の通訳をする子どももケアラーといえることを知った。そして、ヤングケアラーの親御もまた孤立していることも留めておきたいと思う。

まずはケアラーになっている可能性のある生徒について、学校ででき得る限りのサポートをしつつ、その生徒との信頼関係をしっかり築くこと、そして家族と学校との関係も良好な関係を維持することが求められると考えた。

講話の中で、相談窓口や対応方法について話題があった。この内容についても、これまで考えが及ばなかった自分が恥ずかしい、と思うほど、心を打たれた。内容(口述筆記)を以下に記載しておこうと思う。

“望まない孤独”をなくすことがミッション。頼りたくても頼れない、話したくても話せないことをそう呼んでいる。私は子どもたちの自殺をなくしたい。子どもの自殺、虐待の通告件数、不登校の数、どれも過去最高になっている。

相談は対面手技が大原則になっている中、対面では行けない、相談できない子のために電話相談がある。文科省は、今年度初めて、相談先紹介として「チャット相談」が最初にくるように変えた。

日本では、ドイツの宣教師が「いのちの電話」を最初にはじめ、それを上皇后の美智子さまが支援したことで広まっていった。

しかし、子供たちは電話を使っていない。家庭に電話回線を引いていない子もいる。

こうした中で、子どもたちに電話で相談してください、というのはおかしな話であり、電話相談のヤングケアラーの対応窓口を作った自治体はナンセンスである。

電話だからこそ非言語を読み取れるという良さもあるが、電話だと時間や場所を考えないといけない。

だからと言って、「LINE相談(SNS相談窓口)」はギガスクールの一人一台端末ではLINEを登録できないし、LINEは電話番号がないとアカウント登録できない。

問題解決の優先順位が高い家庭では、親が子どもに携帯電話を与えていないケースもあるため、その結果、子どもからの「LINE相談」利用が少ないという現実が起こっている。

講師の行っている事業は「チャット相談」で、ウェブからアクセスできるため、何も登録がいらない。学校のPCや一人一台端末から相談する子、ゲーム機器から相談する子もいる。SNS相談ではなく、チャット相談。SNS相談とチャット相談は、別物である。

エビデンスに基づいた支援、データサイエンティストを置いて、データに基づいた支援を実施している。

夜の22時頃から朝方にかけては、海外にいる日本人に相談対応をしてもらっている。そうしたことで24時間いつでも相談を受け付けることができている。

パンデミックによって、人との繋がりが薄れたことは事実。

受け皿を増やすだけでは、問題は解決しない。カウンセラーが増えても自殺者は増えていることも事実。

相談者「こんなことで相談してよいのでしょうか。」という人が多い。

周囲と良好な人間関係を築いているからこそ、周りにつながりがあるからこそ、頼れない、という子もいる。

“懲罰的な自己責任論”(大人しくて責任感が強く、真面目な子どもほど『自己責任の罫』にかかりやすい等)がなぜ生まれたのか、というのはいろいろな解釈がある。

小沢一郎著「日本改造計画」には、アメリカの自己責任社会というものをどうやって広めていこう?とある。自分が自分の人生を決定する権利がある。

死にたいやつはひとりで死んでいけ、という考え方がある。

まさに、懲罰的な自己責任論という状況。

「お互いに支えていこう、支え合っているんだ」ということが下火になっている。

いかに相手を論破していくか、というところがある種のトレンドになっている。

支え合ってゆっくり生きていこうね、という考え方は話として盛り上がらない、広まっていけないという風潮。

ただ、スティグマというのはそういうところから生まれている。

かわいそうな存在だと見なさない。

問題を見つけ出して支援する、ではなく、好事例を作っていく

具体的にどういう状況が改善できて、どういう効果があったか、ということ当事者たちへ知らせる

相談した先にどうなっていくのか、好事例を見せていくことが重要。洗剤の洗浄力を示すCMのように。